

[総合的な学習]

児童が心を揺らし“自分ごと”としてとらえられる 総合的な学習の時間を目指して

－ 6年生「心つむぎの里・塩沢」の実践を通して－

常山 昭男*

1 研究主題設定の理由

総合的な学習の時間（以下、総合学習）が本格実施に移されてから3年目を迎えた。この間、多くの活動や発表会を参観してきたが、どれも準備や工夫が十分にほどこされ、総合学習もいよいよ軌道に乗り始めたように思える。しかし、見た目の華やかさのわりに児童の姿に心を動かされる場面はあまり多くはない。例えば、目の輝きや強い口調に圧倒されるような場面はあまり見られないのである。

また、活動の最後にはまとめの作文を書くことが当たり前となっている。そして、それらを冊子やリーフレットなどにまとめて、保護者や他校に紹介するケースも増えてきている。しかし、ここでも、心が動かされるような文章にはなかなか出会うことができない。これは、なぜなのだろうか。

嶋野（2004）¹⁾は総合学習の評価のポイントについて言及しているが、その中で次の2つのポイントが心に留まった。

①「総合的な学習の時間」では、分かることだけでなく、「疑うこと」や「分からなくなること」を評価する必要がある。疑うということは、よく分かることの前兆である。また、分からなくなるということは、分かってきたことの証であり、もっとよく分かるようになることの前兆である。

②「ぼくは温泉の料金を調べました。ぼくたちの町には温泉があるので調べるのが大変でした。」という発表では通り一遍当であることを述べた。「それが、どうだというのだ。」「だから何だと言うのだ。」ということに迫っていない。それは、課題が「他人ごと」で「自分ごと（自己関与意識と切実性）」になっていない、ということである。（中略）活動したことや調べて分かったことから導き出される自身の見解や、それに基づく自己の生き方に、どれだけ迫っているかを見分け評価する必要がある。

上記の考えは、奇しくも筆者の考えと一致しており、これを端的に言い換えると、①は“心の揺れ”、②は“自分ごと”になっているか否かを評価する必要があるということになる。そして、この2つのポイントの欠如が、冒頭で述べたような状況につながっているのではないかと考えた。なぜなら、過去に感動を覚えた実践のほとんどが、この2つのポイントを意識したものになっていたと思うからである。

このような考えにもとづき、特に小学校高学年以降において“心の揺れ”と“自分ごと”を常に意識し評価することで、心が動かされるような児童の姿や自己の生き方に迫る児童の姿を期待したいと考え本実践を行った。また、このような活動を構想・実施することが、その後の児童の生活にどのような影響を与えるかについても探してみたい。

2 検証方法

(1) 心の揺れが見られるか

自分の考えを見直したり、迷ったりする言葉が発せられたか〈観察法及び文章の分析〉

(2) 目の前の課題を自分ごととしてとらえているか

①表情が真剣であったり、生き生きとしたりしているか。〈観察法〉

②言葉に力強さがあるか。また、自分の言葉で（メモや原稿に頼らずに）話しているか。〈観察法・ビデオ分析法〉

(3) 自己の生き方を見直しているか

まとめの文章に、今の自分の状態を見つめたり、改善したりしようとする記述が見られるか。〈文章の分析〉

(4) 総合学習での学びが、その後の生活に生かされているか。〈聞き取り調査〉

* 南魚沼市立六日町小学校

3 対象選定のポイント

研究主題にある“心の揺れ”と“自分ごと”をより確かなものにするために、どのような対象を選定するのも重要なポイントとなる。本実践では、以下の2点に留意して対象を選定した。

(1) 児童にとって関心の高い身近な対象を選ぶこと

例えば、山間の学校であれば森、海岸部にある学校であれば海など、その学校の立地条件や地域の特色・特産物などから活動の対象を選びたい。そして、それは児童の発達段階や興味・関心にあったものでありたいと考える。

前年度は、コシヒカリを対象とした活動を展開したが、米は児童にとっても馴染みのある対象であって、児童の“自分ごと”意識を高めることはできた。しかし、まとめの作文には「稲作農家のために」や「塩沢町のために」というような記述が多く、自己関与意識と切実性には欠けていたと言わざるを得なかった。

そこで、本実践では「衣服」を対象として活動を展開することにした。「衣服」は「衣・食・住」という言葉が示すように生活の中の重要な要素であり、小学校高学年ごろからは、児童にとっても（特に女子にとって）一大関心事となる対象である。また、自己の生き方を反映したものでもある。以上の理由から「衣服」を対象として選んだのである。

(2) 現代社会の課題を内在した地域素材を活用すること

本活動では、自分の衣服に着目させる前に、活動の導入部分で「織物」を採り上げる。「織物」はコシヒカリと同様、全国に知られる塩沢町の特産物であり、町内にはいくつもの織物工場が存在し、多くの職人が伝統の技術を現代に伝えているからである。また、つむぎ記念館や鈴木牧之（江戸時代にベストセラーとなった「北越雪譜」の著者。もともとは織物問屋を営んでいた。）記念館など、昔の道具や素材を見たり、機織りを体験したりする施設に恵まれていることも好条件である。

また、「織物」が以下のような現代社会の課題を内在している点も、選定理由の一つに挙げられる。

- ・化学繊維等の普及により、質の良い伝統的な製品が忘れ去られようとしている。
- ・後継者の不足により、地元の伝統工芸が存亡の危機にさらされている。

こうした現代社会の課題からも、児童の“心の揺れ”を生み出したい。

4 活動の実際（平成15年度 N小学校 第6学年「心つむぎの里・塩沢」児童数27名）

活動の様子を時系列に沿って紹介する。研究主題とは直接関与しない場面もあるが、活動の流れが分かりやすいようにそれらも紹介する。研究主題に関わる場面には「自分ごと」または「心の揺れ」の記号を記す。また、検証方法については、〈(1)―(2)〉のように記す。

(1) 「衣服」との出会い（「衣服セッション」）

社会科の学習で縄文時代や弥生時代の食・住について調べたが、その発展的学習として、それぞれの時代（縄文・弥生時代～昭和時代）の衣服について調べ、紙やビニールなどでそれを再現し、全校に紹介する「衣服セッション」を行った。

(2) 「塩沢織物」との出会い

(1)の活動を通して、児童たちは衣服の素材や塩沢の織物について目を向けはじめた。そこで、読書の時間を利用して「北越雪譜」の一部（織物に関係する部分）を読み聞かせた。すると、児童からは「布を織ってみたい。」「昔の布のことを調べてみたい。」という願いが生まれてきた。そこで、鈴木牧之記念館を訪れ、江戸時代の織物の原料と道具、製法について学んだ。また、つむぎ記念館で、機織りを体験した。

(3) 問屋セッション 「自分ごと」

① 活動設定の理由

これまでの活動を通じて学んだり感じたりした「織物」のよさをまとめて、他にPRする活動を設定したいと考えた。こうした場合、ポスターセッションがよく用いられるが、グループで行うと主役と脇役がはっきりしてしまふと予想された。また、必要感のない発表会では、児童に“自分ごと”として受け入れられないであろうとも考えた。そこで、児童一人一人が主役になれる発表形態はないかと考え、「問屋セッション」という発表方法を生み出した。

② 活動内容

2クラスのうち一方のクラスの一人一人が塩沢織物問屋の店主となり、これまでの調査や体験活動の中で感じた“塩沢織物のよさ”をお客（もう一方のクラスの児童と保護者）に伝えた。お客は、その店主の売り込みの内容に応

じて織物の金額を決めていく。そして黑板にお札（付箋紙）を貼っていくことで、どの問屋が売上げを伸ばしているのかが分かるようにした。

③ 児童の様子 〈2)－①, ②〉

自分の活動の成果がリアルタイムで視覚的にとらえられることから、どの店主も売上げを伸ばそうと必死で客引きをしたりPRをしたりして、会場全体が熱気につつまれていた。そのためか、普段はおとなしい子にもいつもとは違う積極的な姿が見られた。

(4) 一日和装体験 心の揺れ

① 活動設定の理由

問屋セッションを通して、児童たちは地元の特産品である「織物」への愛着を高めてきた。しかし、ここまでは「織物」のプラスの面だけに焦点を当ててきたので、ここで、「織物」が抱える現代的な課題に目を向けさせたいと考えた。そのためには、実際に「織物（和服）」を着て長い時間を過ごしてみるのが効果的であると考えた。

② 活動内容

2学期初めに、登校してから下校直前まで和装で過ごす日を設けた。女子は全員浴衣姿であったが、男子は和服をもっている子が少なく、ほとんどの子が地域から借用したはっぴをはおった。

③ 児童の様子 〈1)〉

活動後の感想文に「背筋がすっとしたような気がした。」「動き回れない分、いつもよりもじっくりと友達と話すことができた。」という長所を書いていた子もいたが、ほとんどの子が、「暑苦しかった。」「動きづらかった。」といった短所について記述していた。「織物（和服）」に対する意識が大きく揺れ動いた一日となった。

(5) 修学旅行～繊維博物館の見学～ 心の揺れ

① 活動設定の理由

「織物」という天然繊維に疑問を感じ始めた児童に、今度は化学繊維に着目させたい。「天然」を選ぶべきか、それとも「合理性」を選ぶべきか、さらに児童の頭を悩ませたいと考えたからである。

② 活動内容

東京への修学旅行の際に、天然繊維だけではなく化学繊維や紡績機について豊富な資料を所蔵している東京農工大学附属の繊維博物館に立ち寄り見学をした。

③ 児童の様子 〈1)〉

水や空気の利用して、あっという間に布が織り出される様子に驚きの声をあげる児童たち。1学期の機織り体験で20分ほど織ってもほんの数cmだったこととのあまりの違いに、科学の力を認めざるを得ない様子であった。

(6) 修学旅行～お台場調査活動～ 自分ごと

① 活動設定の理由

地元塩沢で、特産品である織物への愛着を深め、その良さを多くの人に伝えたいと考えた児童であったが、一日和装体験を通して、その気持ちはぐらつきはじめていた。そこで、流行の最先端と言える東京にて、最近のファッションの傾向や人々の和服に対する意識を調べる活動を設定した。また、見知らぬ地で、しかも少人数で活動することにより、他人任せにできない「自分ごと」意識を高められるとも考えた。

② 活動内容

数名ずつのグループに分かれ、道行く人にインタビューをしたり、ファッションの傾向を調べたりした。

③ 児童の様子 〈2)－①, ②〉

見知らぬ土地で、初対面の人とうまくコミュニケーションができるか心配していたが、ほとんどのグループが自分たちから道行く人に声をかけ、情報を得ることができた。また、普段はおとなしいのに、人一倍意欲的に活動していた児童がいたことに驚かされた。

(7) オリジナル服作り 自分ごと

① 活動設定の理由

これまでの活動を通して、児童たちは和服と洋服それぞれの長所と短所を見つけた。そこで、それらの情報を整理しつなげるために、自分たちが理想と考える服作りの活動を設定した。

② 活動内容

まずは、個人で服作りにどんな点を生かしたいかを考えた。次に、同じような考えをもった者同士でグループ（三



人組)を作り、アイデアを出し合っってオリジナル服を作製した。

③ 児童の様子 〈2)－①, ②〉

女子は最初からこの活動に意欲的に取り組んでいた。男子は、どのように活動を進めるべきかイメージがつかめなかったようで、女子に遅れをとる形となったが、実際に製作段階に入ると意欲の高まりが見られた。そして、製作の場面では、古着を利用する、布を染める、ファスナーを付けるなどの工夫が見られた。どのグループもオリジナリティーを表そうと懸命であった。なお、グループは全て3名であった(男女別)が、これは、事前に各自が書いた「自分の理想の衣服」の内容の共通点を見つけて組み合わせたものであった。このことも「自分ごと」の意識を高めていたであろう。

(8) 学習発表会～オリジナルファッションショー～ **自分ごと**

① 活動設定の理由

それぞれのグループの服の長所や工夫を、お互いに情報交換する場を設定したいと考え、学習発表会においてファッションショーを開くことにした。

② 活動内容

体育館のステージを舞台として、グループ毎に自分たちの服とその長所や工夫を、ファッションショー風に発表した。

③ 児童の様子 〈2)－①〉

ファッションショーの進行は、全て児童たちに任せた。また、他のグループの子だけではなく、他学年の児童、中学生、保護者も発表会場に詰めかけたこともあり、多くの児童は緊張した面もちであった。しかし、一人一人が自分の役割を果たそうと懸命であった。

(9) 学習発表会～激論！和服VS洋服～ **自分ごと** **心の揺れ**

① 活動設定の理由及び活動内容

オリジナル服作りでは、和服、洋服の長所に目をむけてきたが、その裏に隠れているそれぞれの短所も明らかにさせたいと考えた。そこで、和服派と洋服派に分かれディベートの形で意見を戦わせる場を設定した。また、この活動の中で相手の意見を聞くことで、自分の考えをもう一度見直してみようとする姿も期待した。

② 児童の様子 〈2)－①, ②および1〉

シナリオなしでの討論会であったことと、ファッションショー同様、多くの参観者がいたことにより、活発な意見交換がなされるか心配であった。しかし、時間が進むに連れて、児童たちの口調も熱を帯びるようになってきた。(詳細については、次項で紹介する。)なお、今回はどちらかの立場を選んで討論していたが、おそらくその中で、自分の考えを揺らしていた子は少なくなかったであろう。

(10) 世界の衣服調べ **心の揺れ**

① 活動設定の理由

日本の衣服についての関心を高めてきた児童たちに、さらに、現代の衣服やファッションのもつ問題点に着目させたいと考えた。そのために、世界の衣服を調べ、日本の衣服やファッションとを比較させる活動を設定した。

② 活動内容

図書室の資料やインターネットからの情報をもとに、自分の調べてみたい国を決め、2～4名のグループを作って調査内容をポスターにまとめた。そして、ポスターセッションの形で情報交換を行った。また、この活動のまとめとして、開発途上国の衣服(生活)の様子を確認するために、ビデオを視聴した。

③ 児童の様子 〈1)〉

ポスターセッションを終えた段階では、ほとんどの児童が衣服の形状や素材の違いなどに着目していた。しかし、中には「〇〇の人々は衣服を大切にしている。」「日本人は衣服にお金をかけすぎている。」などの声も聞かれた。そして、開発途上国の生活ぶりを見た後には、「今の日本人はこれで良いのか?」という疑問の声が多く聞かれるようになった。

(11) 現代ファッションの課題調べ **心の揺れ** **自分ごと**

① 活動設定の理由

前回の活動をきっかけに、現代の日本の衣服やファッションのもつ問題点を追求して欲しいと考えた。

② 活動内容

児童からは「ピアス」「茶髪」「ヘソ出しルック」「ルーズソックス」「厚底ぐつ」「使い捨て」「制服の乱れ・改造」

「体を圧迫する衣服」「化学繊維」「皮革製品」「ブランド志向」「伝統の消滅」「華美な飾り」などが問題点として挙げられた。そして、その中から自分のテーマを選び、インターネットを中心に調べ活動を行った。

また、「制服の乱れ・改造」に関しては、後日、中学校の先生を招き中学生の現状とその弊害について全員で話を聞く機会を設けた。

③ 児童の様子 〈1〉、(2)―①および(3)〉

挙げられた問題点の多くは、一方で児童たちにとって魅力的なものがほとんどであったと思うが、どのグループも課題に正対して活動を進めていた。また、中学校の先生の話にも真剣に耳を傾け、活動の後には「中学校に制服があることの意味が分かりました。」「周りに惑わされずに、きちんとした服装をしたい。」というように、自分の問題としてとらえている声が多く聞かれた。

5 活動の成果

(1) 心の揺れが見られるか

心の揺れが最も顕著に見られたのは、「一日和装体験」であった。和服のもつ欠点を実感することにより、児童はこれまでの自分の考えを見直さざるを得なかった。まさに、理想と現実の間で揺れ動いていたのである。そして、自分が一番大切にすべきことは何なのかを考えはじめた瞬間でもあった。つまり、この“心の揺れ”が“自分ごと”意識を高めていたとも言えるのである。

この他にも、「オリジナル服作り」「激論！和服VS洋服」「世界の衣服調べ」「現代ファッションの課題調べ」でも、現代の日本や自分の衣生活を見つめ直し、疑問を抱く姿が数多く見られた。

(2) 目の前の課題を自分ごととしてとらえているか

「問屋セッション」や「激論！和服VS洋服」では、児童同士の熱の入ったやりとりを見ることができた。また、いずれの活動も発表原稿やシナリオを用意していたわけではなかったが、児童がその場の状況や相手の言葉に臨機応変に対応しようとする姿が見られた。そして、その熱気に周りの大人が圧倒されていた。

特に「激論！～」は20分ほどの討論会であったが、途中、ほとんど間が空くことがなく、次から次へと意見が飛び出した。(ただし、「激論！～」はその形式と時間的な制約から、発言者は全体の半分ほどにとどまった。しかし、発言できなかった子も、発言者の話に真剣に耳を傾ける姿が見られた。) 実際には、次のような意見交換がなされた。

「和服は値段が高い』『その分だけ大切に長く着ることができる。』『洋服は安い』『安い分、その日にあったものが選べる。』『安い分、すぐに買い換えるから、むだが多い。』『和服は、あきてしまったらどうする?』『帯や履物の組み合わせで工夫できる。』『洋服は夏は半袖、冬は長袖と、季節に合わせられる。』『和服も素材によって、夏用と冬用がある。』『洋服は洗濯がしやすい。』『和服は雪さらしや仕立て直しができる。』『しかし、雪さらしは冬にしかできない。』『和服は真心が込められているので、ありがたみがある。』『洋服はありがたみはないが、手軽に買える。』『和服は毎日では着られない』『着物は染め直すことができるのではないか。』

これらのことから、児童は目の前の課題を“自分ごと”ととらえながら活動を進めていたと判断する。

(3) 自己の生き方を見直しているか

最後の活動として、これまでの活動を振り返りまとめの作文を書く場を設定した。そのために、まず、これまで集めたり書いたりした資料や作文を見返し、キーワードをつなげてイメージマップを作成した。次に、そこから柱となる話題を2～3つ選び、構想メモを書いた。そして、最後にそのメモをもとにワープロソフトを使って加除訂正をしながら作文を完成させた。

この一連の活動の中に、今回の分析の視点である「今の自分の状態を見つめたり、改善したりしようとする記述」を促すような指導は行わなかった。そんな状況の中で、どれくらいの児童の作文に、そのような記述が見られたかを分析してみた。すると、内容的には差こそあれ、実に9割ほど(27人中24名)の児童の作文に期待した記述が見られた。例えば、次のような記述である。

私は、これから良いことと悪いことを判断しながら過ごしていこうと思います。特に制服の改造などには注意していきたいです。また、「日本人は恵まれすぎている。」という気持ちを忘れずに、何事もぜいたくをしないように心がけたいです。これからも、衣服についてもっと調べて、健康に過ごせる衣服などを自分でも作れるようになりたいと思います。(Y子)

これまでの実践においても、同様に活動のまとめの作文を書いてきたが、「～な日本になってほしい。」や「若い人には～を気をつけて欲しい。」など、その問題をまだ自分の問題としてはとらえていないと考えられる記述が多くみられ、それが、「やりっぱなし」と言われる状況を表しているのではないかと感じていた。その意味において、今回の結果は、本実践が多くの児童にとって「自己の生き方を見直す」機会となったことを示唆していると言えよう。これは、一年を通じ「自分ごと」を意識した活動展開を心がけてきた成果であると考ええる。

(4) 総合学習での学びが、その後の生活に生かされているか

この活動で学んだ児童が中学生になって、半年近くが経とうとしている時期に聞き取り調査を行った。その児童がまとめの作文に自分のめあてとして書いていたことが実践されているか、この活動で学んだことが生活の中で生かされる可能性があるかを質問したのである。

「厚底ぐつは危険なので履かないようにしたい。」と書いていたY子は、「厚底ぐつは持っているけれど、履こうか履かないようにしようか、迷ってしまう。」と答えた。「衣服を買うときにはできるだけ天然素材の物を選びたい。」と書いていたK男は、「服を選ぶときには、あの学習を思い出す。」と言ってくれた。

その他、「伝統をなくさないために、和服を着る機会を増やしたい。」というような記述が見られた女子の多くが、中学生になってからも和服や浴衣を着た経験があると答えた。また、中学1年生の中にも“腰パン”と呼ばれる好ましくない制服の着方をして見られるようになってきたということだが、この活動を経験した児童には、そのような傾向はほとんど見られないという。ある男子に「自分もまねをしてみたいと思わないか。」と質問したところ、「そう思うこともあるが、それは悪いことだと知っているからできない。」という答えが返ってきた。

このように、活動を通じて各自が立てためあてが、その場のものだけでなく、その後も心に残っているケースが多いことが分かった。また、自分のめあてとしては意識はされていないまでも、この学習での学びがその後の生活にも生かされているケースが少なくないことが分かった。このことが、“心の揺れ”と“自分ごと”を重視してきた本実践の最大の成果であると考ええる。

6 今後の課題

総合学習は学校行事との関連が深い、例えば、自然教室、修学旅行、学習発表会などである。また、稲刈りやお祭りなど、自然条件や地域行事、あるいは地域の人材との関連も深い。それは、総合学習の一つの長所であるとも言えるが、逆に時間的な制約を受けやすい学習であるということもできるであろう。

ここで、心配されるのは、総合学習が時間に追われて形を整えることに終始してしまわないかという点である。今回の主題である“心の揺れ”と“自分ごと”の意識を高めるには、多くの時間が必要である。なぜなら、活動毎に児童の意識を確認するために“書く”活動も重視しなければならないからである。また、児童の意識と活動との間にずれがあるのであれば、それを修正するための新たな活動が必要となってくる。さらに、児童の作文を読んだりまとめたりして、児童の意識を確認する教師の労力も相当なものとなる。事実、本活動においても予定した時間では間に合わず、活動時間を生み出すために教科と関連させた指導を行うなどの工夫が必要となった。

しかし、本稿で述べてきたとおり、総合学習のねらいである「自己の生き方」に迫るためには、こうした活動をおろそかにしてはならないと思うのである。そのためには、時間的に余裕をもたせた活動を構想することと、行事等の時期を考慮した活動の早めの実施を心がけていくことが大切であろう。

引用文献

- 1) 嶋野道弘 「“ごまかし総合”と“ほんもの総合”子どもの発言・発表」『総合的学習を創る1月号』 明治図書、2004年、24～25pp